

欧州放射線学会 ECR2026 参加報告

札幌医科大学附属病院 大橋芳也

2026 年 3 月 4 日から 8 日にかけて、オーストリア・ウィーンの Austria Center Vienna で開催された European Congress of Radiology (ECR 2026) に参加しました。ECR は欧州放射線学会 (European Society of Radiology) が主催する世界最大級の放射線医学関連の国際学会で、世界各国から放射線科医、診療放射線技師、研究者、企業関係者が集まり、最新の画像診断技術や臨床研究の成果が報告されます。2026 年の ECR では演題投稿数が 11,000 件を超え、過去最多を記録するなど、世界中から多くの研究成果が集まる大規模な国際学会となっていました。一方で、国際情勢の影響により中東経由の航空便が一部運航変更となったこともあり、例年と比較してアジア地域からの参加者はやや少ない印象を受けました。

私は本学会で、「Effect of carbon dioxide insufflation on mesenteric venous enhancement timing in contrast-enhanced computed tomography colonography」というテーマで研究発表を行いました。本研究は、CT colonography における炭酸ガス送気が腸間膜静脈の造影動態に与える影響を解析したもので、特に下腸間膜静脈 (IMV) において造影ピークが早期化する可能性を示しました。この結果は、大腸癌術前の血管評価や三次元 CT による術前血管マッピングにおける撮影タイミングの理解や最適化に役立つ知見となると考えています。今回の発表は教育展示部門において Magna Cum Laude を受賞し、多くの演題が集まる国際学会の中で本研究が評価されたことを大変嬉しく思っています。

学会期間中は、AI を活用した画像診断支援技術や Deep Learning Reconstruction (DLR) をはじめとする最新の画像再構成技術、そして近年急速に注目が高まるフォトンカウンティング CT など、次世代 CT 技術に関する多彩な講演や展示を聴講しました。企業展示では各社が最新の CT 装置や画像処理ソフトウェアを競うように紹介しており、臨床応用を見据えた技術開発の最前線を肌で感じることができました。キヤノンブースでは、新しい画像処理基盤 INSTINX が紹介されており、DLR と統合された高速画像再構成やワークフロー効率化を実現する次世代 CT プラットフォームの方向性が示されていました。さらに、マルチポジション撮影を可能とする新型 CT「Aquilion Rise」も発表されており、検査効率の向上を目指した革新的なコンセプトの CT 装置と

して注目を集めていました。また、国内で薬機認証を得たフォトンカウンティング CT 技術を搭載した次世代 CT 装置の展示も行われており、多くの来場者の関心を集めていました。フォトンカウンティング CT は、従来のエネルギー積分型検出器とは異なる検出原理を採用することで、高い空間分解能とエネルギー分解能を同時に実現できる革新的な技術です。こうした展示を通じて、CT 装置の技術進歩が臨床画像診断の質の向上に直結していることを改めて実感しました。日常診療で CT 装置を扱う立場からも、装置技術の進歩は診断の質と検査の可能性を大きく広げるものであると感じます。

会場のあるウィーンは、歴史と芸術が息づく美しい街です。市街中心部にはハプスブルク家ゆかりの荘厳な建築や大聖堂が立ち並び、まるでヨーロッパの歴史の中へ迷い込んだような感覚を覚えます。街にはカフェやレストランも豊富で、学会の合間にはウィーン名物のシュニッツェル(カツレツ)やザッハトルテを楽しむことができました。こうした食文化や街の雰囲気も、海外学会ならではの醍醐味の一つです。

今回の ECR 参加を通じて、世界の研究動向や最新技術に直接触れることができ、自身の研究の立ち位置を改めて見つめ直す貴重な機会となりました。世界中の研究者と同じ舞台上で発表し、議論できる国際学会は、大きな刺激と学びをもたらしてくれます。若い診療放射線技師の皆さんにも、ぜひこうした国際学会への参加に積極的に挑戦し、世界の医療や研究の息吹を肌で感じていただきたいと思います。



学会会場にて



Canon 社製フォトンカウンティング CT



受賞式にて



名物「シュニッツェル」



シュテファン大聖堂にて